

第22回日本時間生物学会学術大会開催報告

上田泰己 大出晃士[✉]

東京大学 大学院医学系研究科 システムズ薬理

理化学研究所 生命システム研究センター 合成生物学研究グループ

第22回時間生物学会学術大会を2015年11月21日から22日にかけて、東京大学本郷キャンパスにて開催し、368名の方々にご参加頂きました。あらためまして、厚く御礼申し上げます。会場は伊藤国際学術研究センターと情報学環・福武ホールの2会場進行で行いました。大きな2つのホールを使用できたのも、32社を超える企業協賛のおかげです。そしてこれほどの協賛を得られたのは、準備委員の先生方のおかげです。協賛依頼の過程で、各方面から〇〇先生のご研究は普段から勉強させていただいておりますので...といった声を頂きました。また、準備委員以外の先生方からも、複数の協賛企業をご紹介いただきました。学会員の皆様の力で、学術大会が成り立っていることを実感した次第です。

さて、22回大会では「生命における時間を再定義する」と題しまして、プログラム委員の先生方には、複数の生物を扱っていただくこと、そして、時間生物学分野で重要と思われる問いかけを指摘していただくこと、をお願いしてシンポジウムを企画して頂きました。結果として、どのシンポジウムも個性あふれる尖った内容となりました。概日時計の分子的理解から、その生物学的な意義を考え直す、あるいはその理解を細胞・組織・個体へと理解を推し進める、まさに王道の観点はもとより、野生に近い条件や多様な生物の比較から見える現象から、生命にとっての時間の意義を考え直させる機会を頂きました。さらにいくつかのシンポジウムでは、主観的な時間感覚にまで言及され、時間生物学分野そのものの扱いうる範囲の広さ、可能性をひしひしと感じました。特別講演も概日時計の歴史と、それを越えた、より広い意味での生命にとっての時間を扱う内容となりました。岡村先生のご尽力により実現したWilliam Schwartz先生の特別講演では、個体の行動から、分子の振る舞いへと展開する概日時計分野の連綿と続く歴史が、そして引き続く北澤茂先生の

特別講演では、まさに脳機能としての時間表現が語られました。特にご参加頂いた若い参加者の皆様は、歴史を知り、そのうえで自分たちが何を切り拓くかを考えるきっかけにさせていただけたのでは、と期待しています。

今大会は、いくつかの新しい試みが行われました。まず、関連集会として吉村先生主導のもと、時間生物学トレーニングコースが開催されました。研究内容そのものではなく、研究テーマの設定から、ラボの運営、グラントの申請に至るまで、学会のシンポジウムでは表現されにくい、先生方の生の声を聴くまたとない機会でした。こういった若手交流の場は、ぜひ続いてほしいと願います。

また、本大会では、ポスター発表者全員によるデータブリッツを行いました。私たちも混乱を生じることを覚悟の上で、それでも活発な議論と交流の起爆剤になるはずだと信じて、実行を決めました。発表を強制することでポスター参加者が減ったかどうか、などと心配しておりましたが、最終的に124演題ものポスター発表登録を頂きました。ということは、2日に分割しても60名余の発表者が舞台前に殺到するわけで、会場係の面々は最後まで戦々恐々としておりました。しかし、それらの心配は全くの杞憂でした。蓋を開けてみれば、スライドの事前提出から、発表時間（30秒！）の厳守、当日の動きに至るまで、全参加者の多大なご協力を頂き、何事もなく120題以上の発表が行われました。心から感謝いたします。その後のポスター発表も、例年以上に活気に満ちていたように感じられたのは、気のせいでしょうか。この企画が続くか否かは解りませんが、締めめの近藤先生の完璧なご発表を含めて、ご参加頂いた皆様の記憶に残る学術大会であったことを願ってやみません。

最後になりましたが、本大会の開催にご尽力いただいた全ての方々、団体、企業の皆様に心から感謝

✉kojiode.licensed@gmail.com

いたします。特に、近藤先生、海老原先生、叡先生、岩崎先生には学会と事務局から多大なご支援と激励を頂きました。また、重吉先生からは開催に際して大変詳細な資料を頂きました。大戸先生、小柳先生には、度重なる些細な質問にいつも丁寧にお答え頂き、何度も助けて頂きました。厚く御礼申し上げます。第23回大会が更なる盛況を迎えることを願ひまして、開催報告とさせていただきます。